



駿府と今川氏

第10回

「女戦国大名」今川^{じゅけい}寿桂尼

京都の公家の 姫君が駿府へ

今川家七代目氏親の正室は、京都の公家中御門宣胤の娘である。残念ながら、彼女の名前は明らかでない。夫氏親が没したあとと落飾し、寿桂尼と名乗ったので、今日、寿桂尼の名で呼ばれているのである。

中御門氏というのは、藤原北家勧修寺流の一つで、坊城家から分かれた中級公家である。寿桂尼の父中御門宣胤は権大納言にまで上っているの、中級公家とはいえず羽振りはよかったものと思われる。

では、その宣胤の娘が公家にならずに、駿府の今川氏親に嫁ぐことになったのはなぜなのだろうか。

実は、中御門宣胤は歌人としても知られており、若いころ、氏親の祖父にあたる今川範政から『万葉集』の秘事口伝を受けていたのである。また、氏親の姉が正親町三条実望に嫁いでいたことも大きな理由になったのではないかと思われる。というのは、宣胤と実望は懇意にしていたからである。

それでもう一つ、中御門宣胤の

思惑としては、地方有力大名に娘を嫁がせることで財政的安定を得たいという願望もあったものと思われる。

病弱な息子

氏輝に代わって

夫氏親が没したとき、跡継ぎの氏輝はまだ十四歳だった。前の年に元服しており、十四歳でも国主を務めることは可能だったはずである。

ところが、若いだけではなく、氏輝はやや病弱だった。そのため、国主としての大役を務めるのは無理な状況だったらしい。そこで、普通ならば重臣の誰かがその補佐役を選ばれるということになるが、このとき補佐役を務めたのは、男の重臣ではなく

氏親未亡人、氏輝の母である寿桂尼だったのである。

晩年の十年間ほど、氏親は中風のため寝たきりだったと言われ、その間、身体



▲唯一、寿桂尼を伝える画像（菊川市正林寺蔵）

撮影：水野 茂

が不自由な氏親に代わって様々なことを取り仕切っていたのが寿桂尼だった。そのため、政務に関わるノウウハウについて熟知しており、「氏親の晩年の続きでやっていけばよい」という思いがあったのかもしれない。

氏親の死後およそ二年間、寿桂尼は「歸」という字の印判を使って文書を出しており、その二年の間、今川家の当主は名目上は氏輝でありながら、実質的には寿桂尼が務めていたと言ってよい。そのため、寿桂尼は「女戦国大名」などと呼ばれている。男尊女卑の風潮が強くなる中で珍しい事例であった。